



葉の舟

たなかひまわり

おかげ横丁は、伊勢が最も賑わった昔を再現した風情溢れる街だ。

その中の一角に、鯛焼きに似た『横丁焼』を売っている甘味処がある。

そこに立ち寄り、買ったその場で焼きたての横丁焼を頬張った。

「これ、恵比寿大黒様ですよね？」

私は、歯型のついた神様をまじまじと見ながら言った。

「縁起物ですよ。生地も柔らかくて美味しいでしょ？」

店主らしき初老の男性が、忙しく手を動かしながら質問に答えてくれた。

「餡も、すごく美味しい！」

「北海道産の小豆で作ってるんです。砂糖も純度の高いの使ってますから」

「そうなんですか」

説明に頷いてから、私は神様の上半身をお腹に収めた。

「お姉さん、どこから来たの？」

「東京です」

「おや、わざわざ遠いところから……伊勢志摩はいい所がいっぱいあるから、楽しんでいってくださいね」

店主はニコリと笑ってそう言った。

私は、その土地の人との会話が楽しみで旅に出る。

だが、一人旅など以前の私には考えられない事だった。

一年前。

雨の日の事だった。

二ヶ月振りに会った順平と、歯車の噛み合わない時間を過ごしていた。

「明日、朝早いから帰るよ」

いつもの店で夕食を取った後、順平が淡々と言った。

まだ九時にもなっていない。

「え、もう帰っちゃうの……？」

私は恐る恐る聞いた。

「うん、朝から会議なんだ」

近頃ずっと、彼との間に厚い壁を感じていた。

目の前にいるのに、心はここにはない……。

そんな順平を前に、押し殺していた寂しさを抑え切れなくなった。

「ずっと一緒にいたいよ……」

順平は、笑みを一瞬にして消した。

「俺に時間の余裕がないことくらいわかるだろ？」

今日だって疲れてたけど、裕子の為に出てきたんだ」

私は甘えたことを後悔した。

「ごめん……」

「謝らなくてもいいよ。でも俺、裕子の気持ちに答えてやれない」

以前の優しい順平はどこにもいなかった。

彼はきっかけを待っていたかのように私の前からいなくなった。

一方的に告げられた別れに、私は引き止める術を持たなかった。

これまで、順平の言動を絶対だと考えていた私だから、別れの時であっても急に自分を変えられるはずもなかった。

この二年間、順平に嫌われないように、懸命に彼の歩調に合わせてきた。

それがいけなかったのかな……。

そう思いながら、ゆるゆるとぼやける空をじっと見つめていた。

付き合い始めから、心の中に順平の存在が消える日はなかった。

夜にメールを送り、鳴らない携帯を握り締めながら眠りにつく。

朝、目覚めるとすぐに携帯を開けて、返信がないことで落胆した。

順平に想われている自信がなくて、彼と繋がっていないと安心出来ない自分がいた。

依存してたんだ……。

私は過去を振り返る。

そして、旅に出る決心をした。

彼と過ごした時間の中に身を置いては自分を変えられない、と思った。

電車で南へ向かった。

車窓から見えるコンクリートの群れは、徐々に木々の緑へと姿を変えていった。

それが途切れると、キラキラと水面が波打つ海が目の前に広がった。

開けた窓から入ってくる風が、私を潮のある方へと導く。

私は次の駅で降りることにした。

懐かしい匂いのする木造の駅舎をくぐり抜け、商店街のある方へ足を運んだ。

「これ、摘まんでみてね」

楊枝にさした品を差し出す人の目が、優しく温かかった。

でも、私は口角を軽く上げるのが精一杯だった。

商店街を抜けると、歩道には砂が混じり始め、ふと覗いた路地の先に砂浜が見えた。

引き寄せられるようにそこに向かって歩いていく。

人のいない静かな海だった。

濡れて色が濃くなった砂のそばまで行き、腰を下ろした。

順平と海、何度も見たっけ……。

ここは初めて来た場所なのに、思い出すのは右側にいた彼の事ばかりだった。

私は声を上げて泣いた。

「大丈夫？ 辛そうだけど……」

しばらくうずくまっていた私の耳元で、突然、女性の声がした。

声のした方に顔を上げると、一人の女性が前屈みの姿勢で覗き込んでいた。

私は慌てて手の平で頬の涙を拭う。

「女の子が泣いてると原因は一つかなって思っちゃうんだけど……座ってもいい？」

そっとしておいて欲しかったが、女性は私が答える間もなく隣に腰掛けた。

「私ね、未来を考えちゃいけない恋をしているんだ。ずっと苦しくて仕方がなかったんだけど、考えている事を全部彼に話したの。嫌われるのを覚悟で」

考えを伝える……。

私が順平に出来なかったことだ。

「『いつも一緒にいたい人はあなただけ、叶わないこともわかってる。それに、男としてパートナーを途中で放り出すような人じゃないからこそ私はあなたが好きなの。でも、今の状態が時々辛くなる事も知っててね』って。彼ね、にっこり笑って、そかって言ってくれたの。私、受け止めてもらえた事が嬉しくて、それまで抱えていたわだかまりが嘘みたいになくなったの。彼が生きててくれたらそれでいいって思うようになったんだ」

善悪は別にしても、私は女性の深い愛に触れた気がした。

「何か、興味のあるものはない？」

自分の事を話し終えた後、女性は話題を変えた。

「悲しみの原因に目を向けていても気持ちはなかなか晴れないから、夢中になれるものがあるといいんだけど」

好きな読書も映画鑑賞も、今の私には何の役にも立たなかった。

私は女性の問いに首を横に振った。

「じゃあ、ちょっとこれ貸してあげる」

そう言って彼女が差し出したのは、一眼レフのカメラだった。

「景色、好きなように撮ってみて」

躊躇している私の手に女性はカメラを持たせ、私達を取り囲む三百六十度の景色をぐるりと指差して言った。

私は、恐々重たいカメラを手にした。

ゆっくりとファインダーを覗き、たまたまそこに写った海にむけてシャッターを切る。

「もっと続けて。好きなだけ撮っていいから」

カメラを下ろそうとした私に、女性は間髪入れずに告げた。

私は言われるままにシャッターを押し続けた。

三十枚くらい撮ったあとだろうか。

「撮った写真、見てみようか」

女性は持っていたカバンの中からノートパソコンを取り出し、画像を取り込んだ。

波は生きていた。

翼の先端に太陽の光を浴びて、白く輝きながら躍っていた。

「写真、初めて？」

パソコンに映し出された画像を見ながら女性が言った。

「はい。こんなに大きなカメラは初めてです」

「鋭い感性持ってるわ。いつもカメラ持ち歩くといいわよ。楽しかったでしょ？」

女性は大袈裟なくらいに賞賛する。

自分の撮影したものが良いのか悪いのかはわからない。

シャッターを押している間、自分が無になり、辛い事を忘れていたのは確かだ。

だが、カメラを下ろすと、再び現実に戻される。

何も障害のない恋だったのに……。

私は小さくため息をついた。

それを聞き取った女性が呟く。

「何か悔やむことがあっても、生きている限り遅いなんてことはないわ。未来は自分次第で良いものにも悪いものにもなるものよ」

慰めようとしているのか……。

真意を掴み切れないまま頷くと、女性は荷物をまとめて去っていった。

旅から帰った数日後、私はリサイクルショップで一眼レフを買った。

そして、月に一度、必ず近場に出掛けることにした。

シャッターを切り始めると無の境地に至り、気づくと百枚を超える写真を撮っている。

それらをコンクールに応募したり、展示会に出展したりと、人の目に触れる機会を持つことで意欲を高めた。

半年が過ぎた頃、順平を思い出さない時間が増えていた。

彼に囚われていた頃は寂しくて苦しくて仕方がなかったのに、今では一人の時間を心から楽しんでいる。

今度の旅では、これまであえて避けていた場所に行こうと思った。

いつも車で連れていってもらった場所へ、今日は電車で行く。

乗換二回。片道一時間半の旅だ。

「着いた……」

岸壁に寄り掛かり、疲れを波の音で癒す。

ここは私の好きな場所であると同時に、順平のお気に入りでもあった。

高さ十メートルはある岩石と、少し右奥に見える一本の松が、今日も変わらず切り取った絵のように鎮座している。

ここの風景を順平は立ち寄るたびに撮影していた。

順平と同じ位置に立ち、シャッターを切る。

一枚、また一枚。

でも、何か足りない。

橙色……夕陽が足りないんだ。

順平の写真には夕陽が必ず写っていた。

巨大な線香花火のように輝く夕陽が欠けていては、この風景は完成されない。

私は夕方までの間、公園を散歩しながら待つことにした。

駐車場を通り抜け、海岸へ下りる。

石段が途切れた先に、川から海へ繋がる細い水流がある。

私は順平と葉の舟を流したことを思い出した。

途中の石に引っかかった舟を手で流すと、順平はそれを咎めた。

自然に任せなきゃダメだよ……。

この時、順平が何を考えているのかわからなかった。

あの日と同じように舟を流してみる。

時々止まりそうになりながら、一瞬強い流れに押され、舟は海に辿り着いた。

最後に自分を助けるのは自分.....。

今やっと、順平の言葉の意味がわかった気がした。

そして、夕暮れ。

私は夕陽の沈む立石を撮影した。

順平のようにはいかなかったが、私なりの絵が撮れた。

一カ月後、その写真は近くの公民館に展示された。

初日、さっそく見に行った。

壁に飾られた写真はすべて、自然をテーマに撮られたものだ。

私は写真に添えられたコメントを読みながら、次はどこに行こうかと心を弾ませていた。

場内を三分の二ほど周った時だった。

一枚の写真の前で動けなくなった。

秋谷海岸で、海に向かってカメラを構えている私の姿が写されている。

いったい、誰が……。

撮影者の名前を見て、私は泣きそうになった。

「水口裕子さんですか？」

安心して立ち竦んでいる私を背後から呼ぶ声がした。

振り向くと係りの女性が立っていた。

「この写真の前で長い時間立ち止まっている女性がいたら、これを渡すように言われてました」

そう言って、女性は私に一通の手紙を差し出した。

手紙は順平からだった。

『元気ですか？ この前たまたま立石に行ったら裕子がいたんで驚いたよ。声を掛けようかと思ったんだけど、裕子が一生懸命写真を撮ってたからやめたんだ。それで俺はこの時の裕子と海を撮った。』

最近、あちこちで裕子の作品を見ていたから、たぶんこの展示会にも出展するだろうと思って、俺も出展したんだ。気が付いてもらえると嬉しいけど。これからもいい作品、期待しているよ。』

手紙を読み終えた私は、息を大きく吸い込みながら呼吸を整えた。

順平と、間接的ではあるが接点を持ったのは半年振りだった。

会いたい気持ちが膨れ上がったものの、彼に依存する弱い人間にだけは戻りたくなかった。

だから、この手紙の返事は出さない事にした。

五日後、これまで何度求めても手に入らなかったものが私の元へ飛び込んできた。

「これから久しぶりに会わない？」

順平からのメールだった。

私は半日考えてから順平に返信した。

そして、うちの近くの公園で彼に会う事にした。

「おう、久しぶり」

先に来ていた順平は、目を細めて笑った。

「元気そうだね」

彼の表情を、私は素直に嬉しく思った。

「この半年何してたの？」

「一人旅」

「ん？ 旅してるのは写真見て知ってたけど一人だったの？」

「うん、どこへでも行っちゃうよ」

「変わったねー、あんなに寂しがりだったのに」

「成長したのよ」

順平は私が返す一言一言が意外なようだった。矢継ぎ早に質問してくる。

「またどっかに行くの？」

「鳥羽に行こうと思ってるんだ。ジュゴンのカップルがいるんだよ」

「そうなんだ。ねえ、たまには誰かと行かない？」

私は順平の言った意味がわからず「え？」と聞き返した。

すると彼はこう付け加えた。

「俺も一緒に行こうかな。ジュゴンに会いたいよ」

私は彼の言葉に驚き、戸惑った。

でも、甘えるだけの私はもういないと心の中で確認し、彼の申し出を受け入れることにした。

「たまには二人旅もいいよね」

完

葉の舟

<http://p.booklog.jp/book/91161>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91161>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91161>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ